

財政逼迫の矛盾

1675年―。3万石を分知して成立した吉田藩は、新藩としての面目保持と体制整備のため多くの費用を必要としていました。しかし、度重なる水害や火災に見舞われ、藩の財政は非常に苦しい状態でした。窮乏した藩財政の負担は、全て領民に転嫁され、全ての物に重税が課せられ、紙1枚でも没収されるありさま。農民はこれに耐えられず、藩に訴状を提出しましたが、要求が受け入れられることはありませんでした。

ひそかな決意

あるとき、上大野村の農民武左衛門は、陣屋に上納に行きました。その際の陣屋の横暴ぶりを見て「たとえ我が身を犠牲にしても藩政を改めさせ、農民をこの苦しみから救おう」と決心。家のことを全て妻に託し、領内の民家一軒一軒を訪ね、地方の実情を調べることに3年、24人の同志を得ることに成功しました。

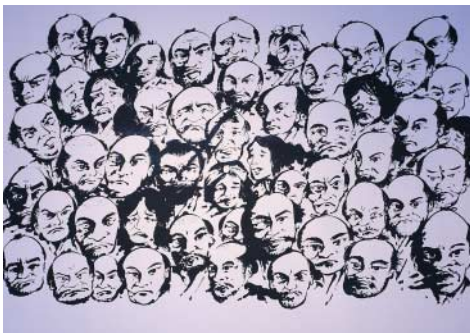
一揆の決行

武左衛門らは、一揆を決意し道

Spirit 1

団結力

飢饉と吉田藩の圧政で農民の生活は窮乏を極めていた武左衛門は立ち上がり、藩政に耐えかねた農民を決起させた百姓一揆をおこし、23ヶ条の要求全てを吉田藩に認めさせた



具として、約2層の大綱、たいまつや竹やりなどをひそかに作っていました。しかし、藩はその不穏な動きを察知し、一揆を起こさないよう説得に努めました。それを受け農民らは協議し、17ヶ条の嘆願書を提出しましたが、藩からの回答は全面拒否。これにより農民たちの不満と怒りの声が領内に満ちあふれ、険悪な空気は頂点に達しました。

1793年2月9日―。ひそかに時が来るのを待っていた武左衛門は、農民らと共に行動を起こしました。一揆決行です。

一揆の群衆は、ホラ貝を吹きながら、むしろ旗を押し立て、銃声を発しながら広見川沿いに進みまわした。約一万人に膨れ上がった群衆は役人の制止や寺の住職らの説得には耳を貸さず、反対に追い返してしまおうほど。

一方、吉田藩は農民を買収して解散に導こうとするなど、あらゆる手を尽くしましたが、自分たちの暮らしを守るという強い意志で結ばれていた農民には、全く効果がありませんでした。

武左衛門の死

2月15日―。この大騒動が幕府



一揆の際に使われた大綱。神社、寺院の護符や、怨念を込めた女性の黒髪などを結び込んでいた。一端を大きな節に、逆の一端を輪にして、いざという時には簡単に必要な長さにつなぎ合わせる事ができるようになっていた。

に知れることを恐れた本家である宇和島藩が、吉田に出向き協議したところ「農民の要求をのみ、早期解決を図ることが上策」と決定。吉田藩に差し出した訴状23ヶ条全てが認められたのです。農民たちは完全勝利を収め、閉ざされていた苦難の道がようやく開かれた喜びに浸りました。

しかし、吉田藩は新たな騒動が起こることを恐れ、一揆首謀者を探し始めました。そして、武左衛門と24人の同志の名前が洗い出されたのです。

断罪に処せられた武左衛門の首は上大野村に「反逆人武左衛門」の標札を付けられ7日間さらし首にされました。時に1795年2月のことでした。

武左衛門は農民の暮らしを、我が身を犠牲にして守り、37歳という短い生涯に幕を閉じました。